

—いも類振興に尽くした人々(5)—



「男爵薯」導入者
りょうきち
川田竜吉
道立中央農試主任研究員
浅間和夫

英国でジャガイモの大切さ知る

川田竜吉は、安政3年(1856年)四国の土佐郡(現高知市旭元町)で、郷土川田小一郎、妻美津の長男として生まれた。15歳のとき岩崎弥太郎の興した三菱商会に父も参画したため、大阪に移り、岩崎邸内に開かれた英語学校で勉強した。明治7年慶応義塾に入ったが自主退学した。明治10年21歳のとき渡英し、グラスゴーの近郊のレンフリーウの造船所で、船舶機械技術を学んだ。さらに、明治11年から翌春まで、グラスゴー大学技芸科に学び、28歳で帰国し、三菱製鉄所機械士となった。その後機関士、日本郵船の製図掛を経て、33歳のとき本社の機関監督助役となった。

川田の父は明治22年第3代日銀総裁となり、明治28年には男爵を授爵した。翌年父が死亡したため、竜吉が爵位を世襲することになった。明治30年、横浜船渠(ドック)初代社長に就任し、イギリスで見聞した上流社会の影響をうけたのか、翌年輕井沢に別荘を設け、33年には約200haの農場経営にのりだし、イギリスより種馬2頭を輸入し、高原野菜の栽培を計画した。

函館郊外に農場経営

このころ、函館ドックの前身函館船渠では、日露戦争後業績不振となっており、川田にその経営立て直しを依頼してきた。

そのかわり、着任した秋函館近郊の七飯に農場約9haを購入し、その経営にも着手した。そして翌年イングランドのサットン父子商会などに明治40年産ジャガイモ種子などを発注した。明治41年早春七飯に着いたジャガイモ品種の中に後日「男爵薯」となる北アメリカ産Irish Cobbler(アイリッシュ・カブラー)も含まれていた。

この原種は、北米に住むアイルランド系靴直し屋さん(Irish Cobbler)が、明治9年(1876年)ころ「アーリー・ローズ」(早生で、皮色が紅)と言う品種を栽培していた畑のなかから見つけた皮色の白い枝変わりであった。その発見場所が北米のどこであったかについては、マサチューセッツのマーブルヘッドと、ニュージャージー州のランバートンの2説がある。

「男爵薯」に育つ

川田が導入したいくつかの品種の中で、七飯村の成田惣次郎が分けてもらった早生品種は毎年成績がよかった。このため近所の親戚に知られ、七飯近郊に広まっていった。それがいつしか「男爵薯」と呼ばれようになった。正式に「男爵薯」と決めたのは昭和3年、北海道の優良品種に決まったときのことである。今日、北海道はもちろん、本州東北、関東、北陸など全国にも栽培されており、日本で一番広くつくられている。

最近「男爵薯」を改良し、もっと早生で、大きく、色白で、ポテトチップスにも向く、「伯爵(ワセシロ)」というジャガイモが出回ってきた。この外「男爵薯」の血を引く品種は数多く、「農林1号」、「キタアカリ」などがある。3品種とも「男爵薯」の良風味をも受け継いでいる。古い品種が永く居座って

バレイショ増収一〇〇〇問答

■三百回余りの講演で、いも作従事者からいたいた千四百余の質問を整理し、これに回答。基本から植付け、収穫・防除までを解説し、厳しさが加わる現代農家に大きな指針を示す好著。北大助教授・吉田稔著 定価七〇〇円 送料二五〇円

清薯源流の砦

■現在の種苗管理センターのいも作関係は、昭和二二年に創設された「馬鈴しょ原種農場」がその出発である。各農場の歴史と現況を報告した本書は、関係者必携の好資料。各農場職員名簿付。いも類振興会編・定価七〇〇円 送料二五〇円

21世紀に向けてのいも作り

■生涯を北海道のバレイショ作に投入した著者快心の著作。その視野は需要者の品質要望から国際競争力まで、魚眼レンズのようにひろがり、いも作従事者の今後の指針を示す。

吉田稔著 定価六〇〇円 送料二五〇円

アンデスから食卓まで

■ジャガイモのふるさとアンデスから出発し、その料理法や品種の特性、栽培から食卓への供給までを、オールカラーで紹介。読んで楽しく、為になる小冊子。

田中智著 定価三〇〇円 送料一七〇円

熱帯アジアの馬鈴薯生産

■東南アジアの馬鈴しょ生産の実態を、各国のレポートから翻訳した貴重な資料。とくにシンポジウムでの発表は、わが国馬鈴しょ作に大きな示唆を与えるものである。

いるのは育種の先進国でもよくあることで、中でもオランダの「Bintje (ビンチェ)」とアメリカにおける「Russet Burbank (ラシット・バーバンク)」は双璧であろう。

オーナードライバーの元祖

川田については、ジャガイモとは無関係なことで紹介しておきたいことがいくつかある。

その1つは、彼がトラピスト修道院で洗礼を受けキリスト教徒となったのが92歳という年であったこと。

また、明治34年にアメリカ製蒸気自動車ロコモビルスタイル・2・スタンダードを新橋にて2,500円で購入し、日本人としては最初のオーナードライバーとなったことである。この蒸気自動車は、SLを思い出すようなごついものではなく、車体は小さくスマートであり、当時のガソリン車に比べて、音が静かであり、振動が少なく、坂を登る力が強いものであった。

明治44年、川田は函館ドックを辞任したが、七飯の農場とは別に、現上磯町の渡島当別に約1,200haの山林、農地の払い下げをうけ、農場建設に本格的に乗り出した。この農場には、アメリカよりトラクタ、モーターなど当時の最も進んだ農業機械を導入し、酪農、畑作、林業の分野で先進的経営に乗り出した。

第二次大戦後の農地開放にもめげずに、農場経営などを続けてきたが、昭和26年、95歳のとき農場で亡くなった。

いも類振興情報 第28号

平成3年7月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
振替・東京3-110152
印刷所 交通印刷株式会社